

開府 名古屋の都市づくり

— 家康の考えたこと —



小治田之真清水

池田 誠一

—— 連載にあたって ——

今年、名古屋の町が開かれてから400年という節目の年です。名古屋は、名古屋城の築城と清須城下等からの住民の引越しによってつくられました。その都市づくりは、時の権力者・徳川家康が、大きな力を傾けたものだったといえます。

では、その400年前の都市づくりとは具体的にどのようなものだったのでしょうか。この記念すべき年に、当時の城と町づくりを振り返りつつ、その今日的な意義を考えてみたいと思います。

【1】ルーツの町・清須…大きかった惣構えの城

1 城下町・清須

名古屋の街は、その西北5^き程の所にある清須(現、清須市)からの住民の移住、いわゆる「清須越」によって生まれました。いわば、清須は名古屋のルーツの都市だといえます。

ではその清須の町は、当時はどのようなものだったのでしょうか。人口は5～7万人とされ、当時の日本では有数の大都市といわれるのです。今回は、名古屋という都市を知る上で、まずこのルーツともいえる都市、清須を訪ねてみたいと思います。

2 清須城の城下町

(1)清須の歴史

尾張国の政治の中心は、古代は現在の稲沢

市の国府宮付近でした。そして中世になると付近に幕府の守護所が設けられ、室町時代には少し東の「下津(おりつ)」に城があったとされています。下津は、折戸→折津→下津、と変ったようで、中世の紀行文には鎌倉街道の宿だったという記述が多く見られます。

下津城は、清須の北3^き程の、清須と同じ五条川の自然堤防上にありました(図1)。1476年、応仁の乱の混乱の中で、守護代の織田家の争いから城が焼かれ、翌年、当時小さな支城であった清須にその守護所が移されることになったのです。「きよす」の文字は、「清須」、「清洲」と両方が使われていますが、古くは清須御厨など「須」の字が使われていたようです。(この連載では清須を使います)

その後、清須城の城主は守護代織田家の複雑な継承の後、織田信長へと引き継がれました。有名な1560年の桶狭間の戦いへの出陣はこの清須からでした。

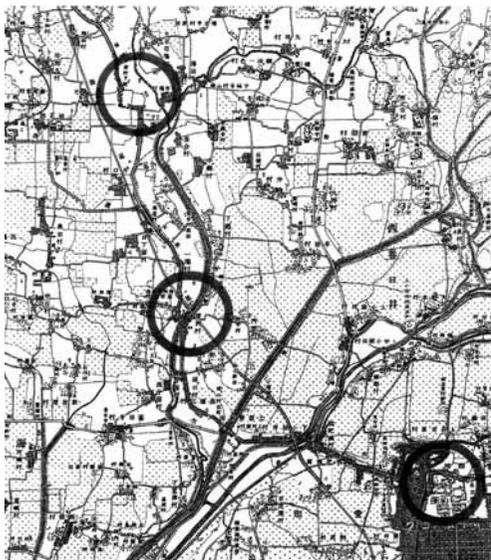


図1 下津と清須と名古屋。下津と清須は五条川でつながっています(明22年)

しかし1563年信長は小牧に新たに城を築き、さらに岐阜、安土へと移っていきました。清須は長男信忠に譲られました。本能寺の変で死に、跡継ぎを議した清須会議で二男の信雄の領地になったのです。小牧長久手戦の後の1585年、信雄は居城を清須に移すとともに城や城下町の拡張に着手しました。そして5年という短い期間でしたが、清須の城を大きく立派なものに変えたのです。

その後、清須城の城主は目まぐるしく変わりました。90年羽柴秀次に、95年福島正則に、1600年の関が原戦の後に家康の4男松平忠吉へと。そして最後に1607年、家康の9男徳川義直へと引き継がれました。ここで遷府を迎えることになったのです。

(2) 惣構えの城

それでは遷府前の清須城はどのような姿だったのでしょうか。意外なことですが、清須城は名古屋城より何倍も大きかったです。名古屋城の外堀が東西、南北ともほぼ1^{km}程度なのに対して、清須城は外堀の南北が2.8^{km}、東西が1.6^{km}程あったのです。ただしこれは少し条件が違っており、清須城はいわゆる「惣構え」という形式の城だったためです。それは城下町の一部も堀の中に取り込むという、当時一般的な城の形でした。(この形式



図2 清須城の三重の堀。内堀と外堀の間に町人が住んだ(清須城案内板)

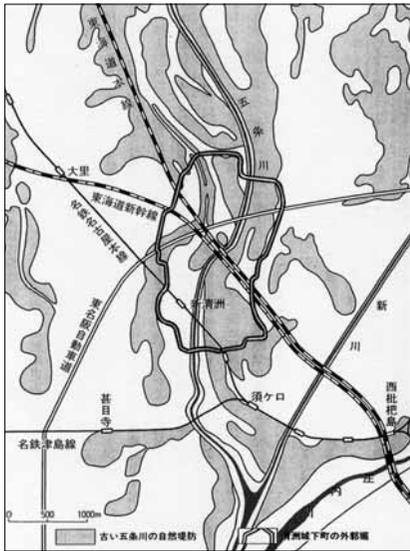
の意味については、回を改めて説明します)

その城は、五条川の流れを取り込み、本丸、内堀、外堀、の三重の堀で囲まれていました(図2)。外堀に囲まれた東、西、南、北の部分には、鍛冶屋町、材木町、本町、樽屋町などの町名が見られることから、職人や商人が住んでいたことが分かります。清須城が大きかったのは町人の町を取り込んだ城だからでした。

(3) 清須の限界

清須は当時、人口が、少しオーバーかもしれませんが、6、7万人とされますから、非常に栄えていた町だったといえるでしょう。しかし清須には地理的な弱点がありました。それは五条川の自然堤防の上に立地していたことです(図3)。自然堤防とは、太古からの洪水の濁流が落とした砂によって形成された微高地で、その上は洪水に対しても安全でした。しかし周辺には低地も多く、堀で囲んだとしても洪水は避けられません。そして戦争の大型化した戦国末期では、簡単に水攻めされてしまう可能性がありました。加えて井戸水の問題もあったようで、当時の清須は都市の発展とともに城下町としての限界が見えつつあったと考えられるのです。

図3
五条川の自然堤防を生かした清須城。拡張するに
は限界があった(文献③)



3 紀行 清須の城下町

… 惣構えの堀跡を探して …

大きかった清須城の跡はどうなったのでしょうか。廃城後はすぐに耕地化されたようで、早々と堀の位置すら分からなくなってしまっていたようです。ところが最近いくつかの発掘から上述のようにその概要が推定され、城下町の姿が明らかになりつつあります。それではその清須の栄華の跡を追って、惣構えの城下を辿ってみましょう。

〈丸の内から〉

名鉄本線の丸の内駅を降ります。丸の内といっても普通しか停まらない無人駅です。駅の付近は城の南側、大手門のあった辺りと考えられますが、まったくイメージがわきませ



清須城の本町通。商人の街が形成されていたと考えられます

ん。西に進むと旧の美濃路です。北はすぐ突き当たりでここも城門があったと考えられる所です。

左、右と曲り広い通りに出ると、まっすぐに北に伸びる道が美濃路であると共に城下の本町通で、戦国時代から続いている道です。名鉄のガードを抜け、下本町、中本町と進みます。桜醸造を過ぎた辺りに内堀がありました。右手裏に回ると少し斜面になった畑地がありますがこれはその跡を示すのでしょうか。



畑地が右に下っており、堀の名残りなのか？

街道を少し戻って信号を西に、長者橋を渡ります。広い通りを西に進んだ、2つ目の信号の辺りが昔は五条川が蛇行して城の外堀になっていた所と考えられます。残念ながらその面影はありませんが、交差点を東北から西南の横断している細い旧道が川の線を残しているようです。その線に沿って東北に進むと津島神社があります。そこを右に曲るとすぐ、清須宿の札の辻に出て、その先は五条橋です。



五条橋から本丸の方向を見る

橋の袂からは上流右手に新しい清洲城の天守を見ることができますが、当時の本丸は川の反対側にありました。川は、今日のように流れていたか、外の堀を迂回していたか、2種類の図があって定かではありません。が、いずれにしても川と多くの堀によって本丸が守られて



清須城の本丸跡の史跡



平成元年に建築された新しい「清洲城」

いたようです。左に信長像の立つ清洲公園をみてJR線の下を潜ると、右には新しい清洲城が、左の奥には小山の上に清洲城址の碑が立っています。ここが城の本丸跡とされる所です。**〈外堀を探して〉**

川に沿って遊歩道を上流に進み、県道を渡って巨大な東名阪道路を潜ります。すぐの道を左に曲り、道なりに西に進むと、右に御園神明社があります。この社は古代、伊勢神宮の地の選定のために倭姫が潔斎をして籠った中島宮が移された神社と説明されています。

この辺りを城の北側の内堀が通っていました。堀跡を追って県道を渡り、北に見えるコンビニの手前の道を左に曲ります。角を左、



中島宮ともされる御園神明社。この付近に内堀があった



水路を北にたどると、その先は帯状に荒地のまま残されていた

右と曲って堀の跡を探しますが見当たりません。西に行くと美濃路です。街道を右に曲って、すぐの道を左に進むと JR 線に出ます。線路の手前を右に進むと、すこし行った駅の手前の斜めの道が、方向から見ても城の外堀の跡のようです。駅前の道に出ると水路があります。少しさかのぼってみると荒地になります。水路と荒地、そして堀の方向の帯状の区画。これこそ外堀の跡、と自ら確信しつつ JR 清洲駅に入りました。

4 織田が造った城

戦国時代、領主は自らの城を造りたがったようです。まして、先祖がつくったものでもなく、さして立地がよいわけでもない城。その上に経済力があればなお更、旧い城へのこだわりは無かったでしょう。

信長は、清須を出て、小牧、岐阜、安土と城を造って移りました。秀吉も、小谷を廃して長浜に城を造り、大坂、伏見、聚落第など多くの城を造りました。家康も、その頃は太田城包囲網として多くの城を造っています。

清須は、家康にとってみれば、織田方が造った城でした。当時は新しい城を作れば住民を新しい城下に移すことも一般的でした。家康にとって、清須城を他に移すことには何の抵抗も無かったのではないのでしょうか。そして新しい城の築城の機運ができたのです。

〈主な参考文献〉

- ① 日下英之『稲沢歴史探訪』(2004、中日出版社)
- ② 中村栄孝『清洲城と名古屋城』(1971、吉川弘文館)
- ③ 井関弘太郎『車窓の風景科学』(1994、東海叢書、名古屋鉄道)